

千葉盲学校幼稚部について

県立千葉盲学校教諭 にしむら みえこ 西村 美絵子



1 はじめに

幼稚部には、3歳児から5歳児までの幼児たちが県内各地から通って来ている。また、乳幼児相談では0歳児から相談を受けており、本人や保護者への早期支援を行っている。

「人は情報の80%を視覚から得る」と言われている。視覚から情報を得ることが難しい乳幼児の発達を促す上で、早期からの支援は大変重要なものとなっている。

2 幼稚部の取組

(1)身体づくり・動きの獲得

見えない・見えにくい幼児は、見てまねをすることで動作を獲得していくことが難しい。また、周りの環境を把握することにも困難さがあるため、存分に身体を動かす経験が不十分である。大人と一緒に、安心できる環境の中で思い切り身体を動かし、身体を動かす楽しさを感じながら、基礎体力や調整力を身に付けられるようにしている。身体の部位や動かし方を丁寧に伝え、ボディイメージを育てていくことも大切である。日常生活動作においても、幼児の発達に応じた段階的な指導・支援が必要となる。触って分かる目印などを活用しながら、自分でできることを増やす取組を行っている。

(2)人との関わり

見えにくさのある幼児は、「友達が今何をしているのか」や、「誰が誰に話しているのか」を把握することが難しい。教師が友達の様子を伝えたり、仲立ちをしたりして、人と関わりながら遊ぶ楽しさを感じられるようにしている。また、話すときには、名前を呼んでか

ら話しかけることで、スムーズなやり取りにつなげていけるようにしている。

(3)あらゆる感覚の活用

視覚活用を促して、見る力を育てたり、触覚や聴覚を活用して、物の形や素材、周りの様子などを知る力を育てたりすることも大切に行っている。「よく見る」経験や「触って分かる」経験を積み重ねることで、「もっと見たい」「もっと知りたい」という意欲の高まりや、概念形成、言葉の理解につながっていく。幼稚部では、実際にいろいろな物に触ったり、校外を散策したり、身体を使って体験したりする「実体験」を大切にしている。

(4)安全で主体的な歩行に向けて

まずは、信頼できる大人と手をつなぎ、安心して歩く経験を通して、歩く楽しさを感じられるようにしている。また、安全な場所で、自ら音源に向かって歩いたり走ったりすることで、自分で移動する楽しさを感じる経験も大切にしている。見えにくさのある幼児でも、位置関係を把握したり、目印（ランドマーク）を活用したり、安全に歩くためのルールを覚えたりすることで、慣れた場所であれば一人で移動できるようになってくる。幼児の発達段階に応じて、自分で移動する力を育てる取組を行っている。

3 おわりに

近年、保育園や地域の療育機関と本校を併用する幼児が増えてきている。個々の幼児の多様な目的に対応できるよう、視覚障害教育の専門性を高め、また、幼児を取り巻く様々な関係機関との連携を図り、幼児たちの育ちを支えていきたいと考えている。